

蔵王ジオパーク

—火山と共に生きる人々と火山の恵み—

蔵王ジオパーク推進協議会(事務局:宮城県蔵王町環境政策課ジオパーク推進室)

ジオパーク専門員 **北川 桐香**



■宮城県蔵王町を中心とする蔵王ジオパーク

蔵王ジオパークは、宮城・山形両県にまたがる蔵王連峰の東麓に抱かれた、宮城県蔵王町を中心とした地域です。

エリアは東西約23km、南北約13km、面積はおよそ153km²と小さな地域ですが、標高差は大きく、海拔標高の最高点は西部の蔵王連峰の一峰・屏風岳で1,825m、最低点は南東部の松川・白石川合流点で20mとなっています。



図1 蔵王町の位置



図2 蔵王ジオパークの範囲

地域西部は山岳・高原地帯となっており、景勝地として知られ年間30万人以上が訪れる火口湖・御釜や、火山麓扇状地

の七日原扇状地が特徴的です。東部は平野・丘陵地帯となっており、地域の中央部を流れる松川流域には河岸段丘が発達し、段丘面上や丘陵地では宮城県一の生産量を誇る梨をはじめとする果樹栽培が盛んに行なわれています。

■蔵王の大地に刻まれた「大地の遺産」

ジオパークとは、過去の地球の活動によって生み出された景観が大切に守られ、教育や持続可能な開発に活用されている地域のことです。形を変え続ける大地を通して地球の歴史を学び、人と地球が共存し続けられる未来を目指して活動しています。日本ジオパークは48地域(うちUNESCO:国際連合教育科学文化機関が認定したユネスコ世界ジオパークは10地域)あり、それぞれが地域の特色を生かした取り組みを行っています。



図3 日本ジオパークの分布

蔵王ジオパークには、活火山である蔵王山をはじめ、短期間で活動を休止したとされる火山・青麻山、ふたつの火山の

活動以前に起こった巨大噴火の名残をとどめる円田盆地があります。これらの火山活動によって生み出された地形は、水や土壌の性質などに作用し、地域の生態系や山麓の人々の暮らしに大きな影響を与えてきました。



図4 晩秋の円田盆地

蔵王の大地は様々なことを記憶しています。地球規模の環境変動があったこと、自然災害のこと、かつて住んでいた生き物や、この土地でたくましく生きた人々のこと…。蔵王ジオパークは「火山と共に生きる」をテーマに、蔵王の大地に刻まれた「大地の遺産」とも呼べる地域の大地・自然・人々の歴史を守り、次世代へつなぐために、保全・研究や教育、産業振興などの活動を続けています。

■火を噴く大地と生きる

ー蔵王山麓の人々の信仰とくらし

西部に位置する蔵王山は、複数のピークの総称で、歴史時代にも多くの活動記録を残す活火山です。およそ100万年前から活動を開始したとされ、最新期である約3万5,000年前からは、馬の背カルデラ内での活動が続いています。五色岳は最新期の火山活動によって形成された火砕丘で、御釜は五色岳の火口です。エメラルドグリーン湖面と、荒涼とした山々が広がる蔵王山頂の景色は、穏やかに見える景色も火山の表情のひとつにすぎないことを思い出させてくれます。

山頂周辺では、高山植物の女王とも呼ばれるコマクサをはじめ、様々な高山植物や、樹氷のもととなるアオモリトドマ

ツ林が見られますが、環境の変化や虫害などの影響を受けており、保全の取り組みが続けられています。



図5 コマクサ (写真は駒草平のもの)



図6 蔵王火山形成史 伴ほか(2015)を参考に作成



図7 火口湖・御釜

御釜展望台から10分ほど登った先にあっただけ、山麓の人々と火山とのつながりを感じる石碑があります。

1623年から1624年(江戸時代初期)にかけて起きた「寛永の大噴火」では、山麓の村々にまで降灰があり、農地や生活に被害が及びました。

村田城主であった伊達宗高は、父の仙台藩主・伊達政宗の命を受け、刈田岳の山頂に祭壇を設けて鎮火を祈りました。程なくして噴火は落ち着いたものの、伊達宗高公は疱瘡によって命を落としてしまいます。領民たちは、鎮火の祈りは命を懸けた「命願」だったとして、宗高の業績をたたえた「伊達宗高公命願碑」が建てられています。



図8 伊達宗高公命願碑

地域のシンボルとも言える蔵王山は、人々にとって信仰の対象でもありました。その信仰を支えたのは、約40万年前から十数万年という比較的短期間で活動を休止した小規模な成層火山・青麻山です。

特徴的な形をした青麻山は、標高799m、最も高いピーク（あけら山）でも820mと、あまり高くはありませんが、堂々とした佇まいの山です。地域の東部に住む人々にとっては身近な山であり、火山学的にも意義のある火山です。

東北日本の火山はそのほとんどが脊梁山脈上に位置しており、蔵王火山もそのひとつである一方、脊梁山脈よりも東側（海溝側）に形成された火山も存在します。青森県の恐山、岩手県の七時雨山、宮城県の七ツ森、青麻山などがこれに該当し、中川ら（1986）は、これらの火山が脊梁火山列とは火山学的に性質が異なるとして「青麻-恐火山列」と名付けました。その名の通り青麻山は、同火山列を代表する第四紀火山です。



図9 青麻山

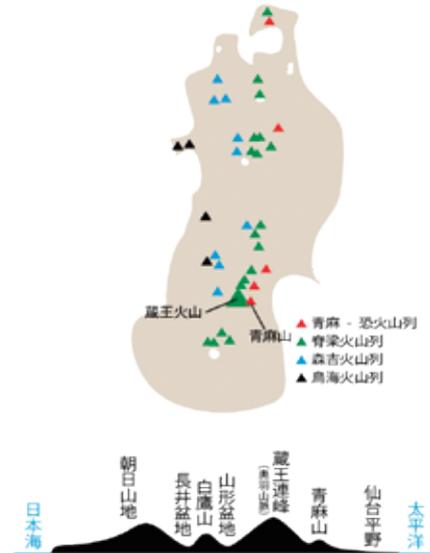


図10 青麻-恐火山列

蔵王山から吹き下ろす冷たく強い風「蔵王おろし」を遮る青麻山の東麓は、気候が寒冷化した時期における縄文人の生活と祈りの場となっていたことが、遺跡の発掘からわかっています。

蔵王山を望む青麻山の山頂にはやがて、蔵王山そのものを神として信仰する「刈田嶺神社」が鎮座し、のちの時代には蔵王山を修行の場とする修験者たちの拠点となりました。

江戸時代後期になると、庶民による信仰登山「蔵王の御山詣り」が流行し、その出発点、そして下山後の憩いの場として発展したのが遠刈田温泉です。ここでは、山麓の豊かな森林資源に育まれた木地師によって、土産品である「こけし」がつくられるようになりました。



図11 遠刈田温泉の公衆浴場・神の湯



図12 遠刈田系こけし

■暮らしを支える「恵みの水」と巨大噴火の名残を留める実りの大地・円田盆地

火山の存在は、地域の産業にも大きな影響を与えてきました。蔵王連峰の中でも「南蔵王」と呼ばれる、屏風岳周辺を水源とする清流「澄川」と、現在も火山活動が続く御釜周辺を水源とする「濁川」という、対照的な二つの川は合流して「松川」となり、地域の中心部を流れています。



図13 澄川(左側)と濁川(右側)は、合流して松川(中央)となります

濁川が流入することで火山由来の成分を含むようになった松川は、農業用水には不適でした。さらに、土砂災害や水害を繰り返す松川とともに暮らしていくため、流域の人々は用水の確保や治水工事に力を注いできました。

現在では、澄川を水源とする農業用水が田畑を潤し、松川が形成した河岸段丘面上では、梨や桃などの果樹栽培が行われています。



図14 農業用水を正確に分ける疣岩円形分水工は1931年(昭和6年)に完成し、90年以上経った今なお現役の施設です。2011年(平成23年)には、公益財団法人土木学会により「選奨土木遺産」にも認定されています。



図15 松川の河岸段丘面上で行なわれる果樹栽培

澄川の水が潤す実りの大地のひとつに、地域の東部に位置する、稲作が盛んな円田盆地があります。円田盆地は、蔵王山や青麻山が活動を始めるはるか以前、約370万年前の巨大噴火によって形成された巨大なくぼ地・カルデラの名残をとどめる場所です。「白石カルデラ」と名付けられたこの地形は、円田盆地から青麻山を覆い、白石市まで至る巨大なカルデラです。このカルデラの噴出物は円田盆地周辺だけでなく、約30km離れた仙台市の広瀬川周辺にも数mの厚さで堆積しており、長い間謎に包まれていた「広瀬川凝灰岩」の給源と考えられています。

また、円田盆地周辺には、湖底に堆積した珪藻土が分布することから、かつては大きな湖であったと考えられています。

円田盆地では弥生時代以降の遺跡が数多く発見されており、稲作に適した盆地の地形が、古くから人々の生活に利用されてきたことがうかがえます。



図16 円田盆地の水田に映る蔵王連峰と青麻山

春、まだ残雪の残る季節。円田盆地の水田は田植えに向け、蔵王連峰からもたらされた恵みの水をたっぷりとたたえています。水面に映る蔵王の山なみと青麻山の景色は、見慣れた風景の中にも、ダイナミックな地球の歴史が刻まれていることを静かに教えてくれます。

■大地の多様性が生み出す特産品の多様性

ここまで、蔵王ジオパークの大地を形作る三つの火山と、それらが織りなす景色や人々の暮らしを紹介してきました。この大地の多様性は、特産品の多様性を生み出すことにもつながっています。

火山麓扇状地である七日原扇状地では、主に火山灰から成り水はけのよい土壌を活かして、大根をはじめとする高原野菜が栽培されています。扇状地のなだらかな地形と比較的冷涼な気候は酪農にも適しており、新鮮な生乳を使ったチーズの生産も行われています。

このほかにも、地域内では、これまで紹介してきた梨や桃などの果樹栽培や米作りなどが行われています。これらの産業が今も受け継がれている背景には、地理的要因と歴史的背景が深く関わっています。

今、目の前に広がる景色や、何気ない日々の暮らしは、ここで生き抜いてきた人々が、蔵王の大地で「火山とともに生きる」ために考え出してきた営みなのです。



図17 上空から望む七日原扇状地



図18 「みやぎ蔵王ブランド」にも認定されているチーズ（一財）蔵王酪農センター

■蔵王ジオパークのあゆみ

蔵王ジオパークの活動が始まったのは、2013年（平成25年）のことです。当初の計画は、宮城県白石市・七ヶ宿町・川崎町、山形県山形市・上山市の環蔵王3市3町の広域連携でしたが、2020年（令和2年）からは蔵王町1町単独での「蔵王ジオパーク構想」を推進してきました。

10年目の節目となる2023年（令和5年）4月、日本ジオパーク新規認定申請にチャレンジし、8月には現地調査が行われましたが、その年の結果は「認定保留」。2年間の期限内に日本ジオパーク委員会より示された課題を改善し、報告書の提出をもって再度認定の可否が審議されるというものでした。

示された課題は「ロゴマークを活用した可視性の向上」「拠点施設の整備」「運営体制の強化」など10項目で、これらの課題の改善に注力し、2024年（令和6年）12月、日本ジオパーク委員会へ改めて報告書を提出しました。



図19 蔵王ジオパークのロゴマーク：全体として蔵王の御釜をモチーフに、青麻山（青）、秋の円田盆地（黄）、火山（赤）、駒草や桜などの自然（ピンク）をカラーで表現し、火山の成り立ちを3色の層でイメージしています。青色と黄色が重なる部分は、地域を支え、自然を守る人々の「手」をあらわしています。

そして迎えた2025年（令和7年）1月27日、第53回日本ジオパーク委員会において、蔵王ジオパークは日本ジオパークに認定されました。構想から足掛け12年、長年にわたる取り組みの末に実現したこの認定は、活動に携わってきた地域の方々の努力が結実したものでした。



図20 日本ジオパーク認定時の集合写真

■蔵王ジオパークと私

蛇足になりますが、最後に少しでも、私の感じる蔵王ジオパークの魅力を書き留めておこうと思います。

蔵王ジオパークの存在を思い出したのは、2020年（令和2年）のことです。当時、山形大学の博士前期課程を修了し、出身地である青森県・下北ジオパークのスタッフとして働き始めたばかりの私のところへ飛び込んできたのが「蔵王ジオパークが再始動する」というニュースでした。大学の恩師が蔵王ジオパークに関わっていたことを思い出し、もしかしたら仕事を通じて再会する機会があるかもしれないな、そう感じたのが、蔵王ジオ

パークとの久しぶりの接点でした。

転機となったのは、コロナ禍が少しずつ落ち着き始めた2022年（令和4年）の夏のこと。久しぶりに訪れた大学で、かの恩師から「蔵王ジオパークで専門員を探している」という話を伺い「何か力になれるのであれば、お手伝いしますよ」とお答えしました。



図21 地域の学校の現地学習のようす

帰りの新幹線でふとメールを確認すると、すでに恩師から事務局へ「適任者がいました」とのメールが送られていたのには驚きましたが、その後、試験と面接を経て、2023年（令和5年）4月、宮城県蔵王町にジオパーク専門員として着任することになりました。

蔵王町は学生時代に何度も足を運んだことのある場所でしたが、実際に住んでみると、田園地帯や果樹園が見られるだけでなく、温泉街の趣き深い景色や荒々しい火山のようすと、小さな町域ながら見える風景にバリエーションがあることに驚きました。

地域のどこからでも山が見えることもあり、目の前に広がる景色とその背景にある地球の活動へ想いを馳せることができ、感動が尽きない町だと感じています。

特筆すべきは「蔵王を愛する人々」の存在です。認定ガイド、地域の宿泊業・飲食業などの事業者、農家の方々、それぞれが子どもたちやゲストに対して、地域への愛を自分のことばで語るができることは、蔵王ジオパークの大きな魅力です。

■蔵王ジオパークの活動とこれから

蔵王ジオパークは、2026年（令和8年）1月に、日本ジオパーク認定から1周年を迎えました。去る1月24日（土）には、日本ジオパーク認定1周年記念講演会「蔵王山は語る―研究から解き明かす火山と火口湖・御釜の姿―」を開催し、蔵王ジオパーク内で行われている学術研究の最前線を紹介しました。

当日は130名を超える参加者が来場し、「もっと長い時間聞きたかった」「また続きを聞けるのを楽しみにしています」などの声が寄せられました。とっつきづらい印象を持たれがちな学術研究の講演会でありながら、参加者が思い思いに楽しんでいた様子がうかがえました。

分野を超えて研究者が互いに成果を発表し、地域の方々と直接交流する機会を生み出したことは、「保全・研究」「教育」「持続可能な産業振興」という活動の軸を持つジオパークの枠組みを活用したからこそ実現できたものと感じています。



図22 1周年記念講演会に登壇していただいた山形大学・伴雅雄教授

蔵王ジオパークでは、ガイド団体による保全活動への参加や支援、学術研究の促進、地域の小・中・高校と連携した教育活動、地域内外の方を対象としたガイドツアーなどを通して、地域の「大地の遺産」の価値や魅力を発信しています。



図23 澄川・濁川合流点での現地学習



図24 認定ガイドがご案内するジオツアー

毎年秋には、宮城県蔵王高等学校・宮城県白石高等学校蔵王キャンパスの生徒たちが地域について学び、ツアーを企画する連携授業「ジオツアー実践学習」が行なわれています。この学習は、行程やガイド原稿の作成、当日の点呼やお客様の誘導まですべてが高校生によって作り上げられるもので、高校生ならではのユニークなガイドが人気を博しています。

2022年（令和4年）から、同高校では全校生徒・全教員が参加する「クラブ・ジオパーク」の取り組みがスタートしており、この中で防災学習やジオツアー実践学習、地域連携事業などが進められています。



図25 高校生のガイド

いま、私たちが楽しんでいる蔵王の景色を次世代へつなぎ、将来の子どもたちも余すことなく楽しめるように、それらを守りながら活用することで、蔵王の景色から地球全体のことを考えられる人を育てるために、蔵王ジオパークは取り組みを続けていきます。

■蔵王ジオパークを訪れるなら…

蔵王町の遠刈田温泉街から歩いて500mほどの場所に、蔵王ジオパークの拠点施設である「蔵王ジオパークセンター」があります。蔵王ジオパーク地域内を周遊する際の「旅の出発点」となる施設で、地域のみどころを紹介する展示パネルや蔵王山頂で見られる岩石標本などをご覧ください。

平日は事務局スタッフが、土日祝日は認定ガイドが常駐しており、お客様の要望にお応えしたモデルコースも提案しています。蔵王ジオパークのサイトが見たい！という方は、ぜひ一度拠点施設へお立ち寄りください。みなさまのご来館をお待ちしております。



蔵王ジオパークセンター (遠刈田地区公民館内)

所在地：宮城県刈田郡蔵王町遠刈田温泉
字遠刈田北山18-2

休館日：月曜日(祝日の場合は翌日休館)・
年末年始

電 話：0224-34-2331

※見学等のお申し込みやお問い合わせは協議会事務局 (0224-33-3007) へお願いいたします